

舟入むつみ園

一般養護



舟入むつみ園は、市内天満川の河岸・公園に隣接した静かなたたずまいにあり、しかも交通至便で広島市立舟入病院と隣接し養護ホームとしての環境にめぐまれており、昭和45年（1970年）4月に一般養護及び特別養護の併設施設として開設された。

現在は、平成5年（1993年）度の居住環境等の整備による全面改修により、入園定員100人の一般養護と定員4人のショートステイの施設として、また、送迎方式によるデイサービスも実施している。

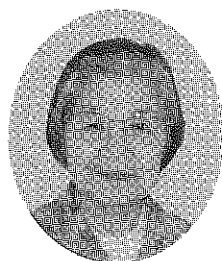
所在地：〒730-0844 広島市中区舟入幸町14番11号

（TEL 082-291-1555）

（FAX 082-291-1854）

十六歳の夏

石原 壽恵子（八十一歳）



被爆地……入市（八月十二日・十日市町）
とうかいち

当時の急性症状……切り傷・発熱

家族の死亡……父

現在の病状……高血圧症・高脂血症

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日の朝、六時四十分頃「行つて参ります」「行つてらっしゃい」と父と母に御挨拶ごあいさつをして、己斐中町こいなかの家を出ました。後から出る父とは最期になってしまふ会話でした。己斐駅こいから市電に乗り横川駅よながわまで行き、国鉄可部線かべに乗り七軒茶屋駅しちけんぢやで下車し、歩いて学校工場となつていた川内村公民館かわうちに着きました。朝礼で先生のお話を整列して聞いている時、村の数人が、南の空を見ておられて、先生も外に出られました。私も空を見ましたら、大きな真つ赤な電球のような丸いものがゆっくり降りて来て、大きな音と共にガチャガチャと窓ガラスが全部飛び散り、私の左耳の横に破片はへんが当た

り血がいつぱい流れてモンペが血だらけになりました。先生がすぐ怪我をした者はお医者さんに行くように言われ、七軒茶屋近くに疎開されていたお医者さんに行きました。私は一針縫うことになりましたが、私よりひどい大怪我の人、大火傷の人が沢山逃げて来られ、先生に診て頂いてすぐ亡くなられた人もあり、大混乱になりました。私は一番に縫って頂きましたが、「すぐ家に帰りたい」とお伝えしましたら「広島に医者がおらんかも分らん、六日たったら糸を抜いてあげるからここに居れ」とお忙しい中、優しく言って下さいました。その時にずっと私に付いて下さった親切なお友達が、熱が出て歩けなくなった私を近くの農家のおばさんにお願ひして、休ませて下さったのです。農家のおばさんも優しく、お布団を敷いて下さり、氷枕や体温計などを貸していただき、ご心配をおかけしました。お友達のお名前も農家のおばさんのお名前も忘れてしまつて、心から申し訳なく思います。あの時の御恩は一生忘れません。今はおかげさまで八十歳まで生きさせて頂き、ありがとうございます。命を大事に平和で核のない世の中になりますよう心から願っています。

奇跡^{きせき}の被爆体験

沖 鈴 江（七十九歳）



被 爆 地 …… 皆実町^{みなみ}（爆心地より二・三km）

当時の急性症状 …… 下痢・身体のだるさ

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 狭心症・肝炎・甲状腺機能低下症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は両親と妹の四人で皆実町^{みなみ}三丁目（専売公社とガス会社の間で爆心地から二・三kmの所）に住んでいました。私は女学校三年生で、学徒動員^{がくどういん}で中電話局^{なか}の交換手をしておりました。八月六日は、前日よりの腹痛の為、休んで自宅の二階^ふで臥せつていると、空襲警報^{くうしゅうけいほう}のサイレンが鳴り、そして解除になりました。暫く^{しばらく}して閉じた眼の裏側に、虹色の強烈な光が差し込んできて、思わず階段の所まで走って行きました。何とも言い難い^{がた}大きな音がして、そのまま階段の下まで吹き飛ばされた途端^{とたん}、物音一つしない真黒な闇^{やみ}になり、私は死んだのだと思いました。暫く^{しばらく}して妹が声を掛けてく

れ、私の上に被^{かぶ}さっていた壁土や材木等を除^{のぞ}いてくれ、やつとの思いで這^はい出しました。妹は、女学校の二年生で、私と同じように学徒動員^{がくとうどういん}をさせられていましたが、その日は、丁度^{ちょうど}停電で休んでおり助かりました。母は顔と手に火傷^{やけど}をしていましたが、揺れる家に入り、私の洋服と位牌^{いはい}を背中に負^おつて出て来ました。その時初めて、下着姿である事に気がつきました。そうこうするうちに、専売公社^{せんばいこうしゃ}から出火した火が我家に燃え移ってしまいましたので、少し離れた畑に逃げました。そこは蓮根^{れんこん}畑でしたが、B29が何度も上空を旋回^{せんかい}するので、その度に泥だらけになりながら畑の中に入りました。やがて日が暮れると、辺りが燃える火で真赤になり、広島^{ひろしま}の町は燃え尽きました。次の日から父を探しに出かけましたが、道中見るのは真黒になった屍^{しかばね}、火傷^{やけど}で黒くなりながら歩いている人、人も馬も異様^{いよう}にお腹が膨^ふらんでいました。父の消息^{しやうそく}が解^{わか}つたのは三日目でした。全身火傷^{やけど}を負^おつていましたが、手当を受けておりました。それから長い間かかりましたが、奇跡^{きせき}的に回復し、元気になり、勤めを全うすることが出来ました。

電話局の友達^{ともだち}は、交換台に座ったままで黒く炭化^{たんか}し、他の人達も即死^{そくし}状態だったそうです。今でも友達のことを思うと、自分だけが生き残ったという罪^{つみ}の意識^{いしき}に苛^{さい}まれることがあります。今、豊かな時代に生きていても、当時の出来事を思う時、胸が締め付けられるようで涙が出ます。そして、合掌^{がっしょう}です。

原爆と家族の奇跡きせき

加藤 萬喜子（七十九歳）



被爆地……上柳町（爆心地より一・二km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……虚血性心疾患・高脂血症・変形性膝関節症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は女学校四年生、学徒動員で日本製鋼に行っていました。八月六日は工場が休日で、祖母、三姉妹、従姉妹の五人で上柳町の家におりました。B29が西空に向かつて行くのを見た途端、ものすごい爆音、熱射の光とともに原爆が炸裂しました。爆音と共に家は爆風で全壊し、私達全員、家の下敷きになりました。土砂、埃、瓦礫の闇の中どう這い上がったのか覚えていませんが私達は抜け出ることが出来ました。祖母は、火傷で皮膚が焼け爛れた一歳の従妹を抱き抱え、私は下の妹を負って榮橋に向かつて逃げました。

途中で見る人達は、火傷で両手が馬鈴薯の皮を剥いたようにダラリと皮膚がぶら下がった人、全身火傷で動けない人、目が見えなくなっているのに人の波について逃げようとしている人、それはまさに地獄絵そのものでした。私達は鶴羽根神社を通つて牛田山に逃げました。夕方、呉海軍のトラックが来て乾パンの配給がありました。父は、私達の消息を求めて自宅の焼け跡を捜しましたが見つからないので、牛田の知人宅を尋ねて来ました。私達はそこで家族に会うことができ、家族全員命拾ひしたことを喜び合い、生きている幸を感じました。上柳町のような爆心地近くにいなながら、ガスを吸うことも無く、倒壊した家屋の下から脱出できたのは、今もつて不思議です。私は、その年の四月に亡くなった母が家族を守り抜いてくれたお陰とします。夜が来ると、周囲が見えないだけ余計に負傷者の呻き声が気になりました。朝が来るとあの人も、この人も亡くなつておられました。工兵橋の土手には死体が山と積まれ、夏場の事で異臭を放っていました。それは言葉にならないものでした。

七十九歳になった私ですが、当時の光景を鮮明に憶えています。二度とあの悲惨な戦争が起きることがありませんよう、私達が味わった被爆体験を風化させないようと願つて止みません。

私の原爆体験記

河 本 由 子 (七十六歳)



被 爆 地 …… 入市 (八月八日・横川町)

当時の急性症状 …… 黄疽・発熱

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… メニエル症候群・不眠症

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日、私は県立第一高女^{けんりつだいいちこうじょ}一年生でした。当時、安佐郡八木村梅林^{あさぐんやぎむらばいりん}にありまして、県女の山中寮で一年生の寄宿舎生^{きしゆくしやせい}三十人と共に生活し、勉学は当時の河内小学校^{こうち}の二階に教室を間借りし、寄宿舎生^{きしゆくしやせい}と可部線經由^{かべ}来る生徒が勉強していました。被爆当時は「家事」の授業中でした。私は咄嗟^{とつさ}に手許^{てもと}にあった救急カバンと防空頭巾^{ぼうくうずきん}を持つと皆で階段を駆け降り外に出ました。学校の側の麻の畑に身を伏して見たキノコ雲と、B29の去^さって行く景色は今も覚えています。

原爆の惨禍^{さんか}を見たのは、翌々日、帰宅の為に横川^{よこがわ}に入市してからです。私は、廿日市^{はつかいち}

方面に帰る友人と三人で肩を寄せ合い横川橋を渡ると壊滅した町並には、至る所から火が噴き上がっていました。ふと川を見ると、水を求めて入ったのであるう人間と動物の死体が浮いていました。私達三人は、身を寄せ合つて互いに励ましなが、廿日市に着いたら、木炭車バスに乗れるからと歩いたのです。しかし、廿日市に着いても、頭に傷を負いそこに蛆がわいたり、被爆して様々に傷を負った人達がバス停に長い列を作つて並んでいました。とても乗る事は出来ない、再び歩いて玖島分れで、友と別れ、途中から一緒に歩いて来た山口県出身の女の子と二人で、浅原の自宅までやつとの思いで辿り着いた時には、既に日は暮れ、空に星が瞬いていました。共に帰つた人は、実家が山口ですので、その夜は我が家に泊まってもらいました。

その後、私は暗い中で、掘り起こされた松の根をみれば、被災者に見え、魚肉類を焼く臭いが鼻につき、暫くは食べられませんでした。後で聞きますと家の者が山中寮まで迎えに来てくれたのですが、すれ違つて会う事が出来なかつたそうです。家に着いてから発熱が続き、二週間後には、肌着も真黄色になる程の黄疸症状が出現した。医師だった父も原因が解らず、「奇病」かもと申していました。後になつて原爆症だと判明しました。姉妹三人共、原爆症になりましたが、現在に至つても元気で過ごせていることは有難いことです。

私は今、舟入むつみ園で平穩^{へいおん}に生活できていることを心から感謝しております。



ホームの「お花見会」

被爆で失った尊とうとい生命

木村 英子（八十四歳）



被爆地……入市（八月十日・猿楽町）
さるかく

当時の急性症状……歯茎の出血・目の充血

家族の死亡……なし

現在の病状……糖尿病・高血圧・脊椎圧迫骨折

被爆時の状況及びその後の生活

その当時、私は安佐郡あさぐん可部加古町かこに住んでおり、隣組となりぐみが組織され、何事も隣組で団結して行動せよといった時代でした。八月六日の朝、中島駅なかしま近くの軍靴を作っている工場で、動力ミシンで縫製作業ほうせいに取り掛かった間なし、ドンという爆音と光に思わずミシンの下にしゃがみ込みました。気を取り直して外を見ると広島までは二十キロも離れているのに、目の前でモクモクとキノコ雲が上がるのが見え、広島方面は、大変だとそわそわするのみでした。夕暮れになり、トラックが二台来て、重症者じゅうしやうしや数人を降ろして立ち去りました。私達は広場にテントを張り、降ろされた人達の介護に当た

りました。母親の背でつい先まで、「お母ちゃん」と言っていたのに冷たくなっている子、鼻血が止まらず、「助けて下さい。」と連呼れんこしている人、焼け爛ただれて苦しむ人達、まさに生き地獄です。救護の手も回らず私は少しでも役に立てばと手伝いをしました。時が経たち、ふと仁保町の実家に住む両親と兄弟の安否あんびが気になり、不安が募つつて来ました。

八月十日、可部線かべで長束ながつかまで行き、そこから徒歩で横川よがわまで辿り着くと、そこは見渡す限り焼け野原でした。方向が定さだまらず、夢ではないかと目を見張みはつて立ち止まりながら、相生橋あいおいばしを頼たよりに土手筋すぢを下りました。土手には真まつ黒に焦こげた死体がずらりと並べられ、左手の川面には、赤茶とも黒とも見える死体が浮いていました。瓦礫がれきの原と化した街の跡あとには、行き交かう人も無く、馬の死骸しかいが重なり合あったその側そばを通り、瓦礫がれきを踏みしめ、京橋川きやうばしを渡り、やっと我家に辿たどりつきました。すると、建物疎開そかいに出ていた母は、京橋付近きやうばしで被爆し、頭に深い傷を負おつて牛田うしたの收容先から二日目に帰った所でした。他の家族も傷を負おいながらも命だけは助かり、四日目に全員再会さいかいを喜び合いました。しかし、実家の隣の友人は学徒動員がくどういんで帰って来ることはありませんでした。その後、母は苦痛の中で生き、四年後に他界たかいしました。多くの尊とうとい命が失われて終戦となり、それからまた、私たち被爆者は厳きびしい時代を耐たえて行かねばなりません

んでした。

しかし、私は今、むつみ園に入所させて頂き、日々安堵の内に暮らしていける事を感謝しております。反面、未だ被爆の影響で苦しんでおられる方々のこと、犠牲になられた方々のことを思いますと、平和への祈りの声を断つてはいけないと思うのです。

私の被爆の証し

木村 ヨシエ（八十四歳）



被爆地……入市（八月七日・中島本町）
当時の急性症状……発熱・下痢・嘔吐・脱毛
家族の死亡……姉夫婦、姪、甥
現在の病状……高血圧・高脂血症・白内障・腹壁癭痕ヘルニア

被爆時の状況及びその後の生活

その当時、私は二十一歳でした。七十歳の父と二人で、山口県岩国市藤生（岩国駅

から五分)に住んでいました。私は七人兄弟の末子で、五人の兄は出征し、姉は結婚して、医師である夫と三人の子供と共に広島市中島本町に住んでいました。

原爆投下のことを知ったのは八月六日の夕方、岩国駅いわくにの周りに大勢の人々が集まり、「広島で大破壊があつたらしい」「大勢死人が出て大変らしい」との噂を聞き、その日は切符が手に入らず、翌日一番の汽車に乗り、父と私は広島に向かいました。しかし、列車は己斐駅で止まってしまい、それ以上進みませんでした。私達は、己斐駅から徒歩で中島本町を目指し歩き始めました。今まで見たことの無い天地の風景でした。焼け焦げた子供達の着物や防空頭巾が至る処に散らばって、町は廃墟と化し地獄の有り様でした。道も解らない中を様々な障害物を跨ぎ、ただひたすら父の背を見て中島本町へ急ぐのですが、その途中どの人も男か女か判らない状態でただ「水をくれ、水が飲みたい」と言われましたが、父に遅れてはと思うと立ち止まることも出来ず、ひたすら歩いて、昼過ぎに姉の家があつたであろうと思われる場所まで辿り着きました。しかし、そこには家はおろか姉達家族の痕跡すら有りませんでした。今ならSF映画のように、蒸発したとでも思うでしょう。人や建物が跡形もなく消え去るとは何という悲しい事か。尋ねる人も無く年老いた父に連れられて西警察署に向き、惨事の様子を聞き、「暫く日を置いて来てみたら良からう」との言葉に私達は、その日は一旦、

岩国^{いわくに}に帰り、一週間後、再び広島に来ました。しかし、前回より片付いてはいるものの姉達の行方^{ゆくえ}は解^{わか}らず、惨^{むご}い話に生きて行く力が遠^{とお}のく思いでした。

その後、私も父も、下痢^{げり}と発熱^{ねつ}、嘔吐^{おうと}が続^つき、私は半月後には髪の毛が全部抜け落ち、その後に生えた髪はチリチリで白髪交じりでした。父は三年後に亡くなりました。

今、こうしてむつみ園で生活し、学生さん達に被爆体験を語る度に平和の裏^{ひそ}に潜^{ひそ}む多くの悲しみを覚えるのです。



学校児童の平和学習

「ピカッ」眩まよひしい光と大きな音

佐々木 寿美江（七十八歳）



被爆地……皆実町二丁目（爆心地より二・三km）

当時の急性症状……嘔吐・下痢・発熱

家族の死亡……なし

現在の症状……高血圧症・胃潰瘍

被爆時の状況とその後生活

突然の光と大きな音と共に建物が倒壊し、運命の大悲劇との出逢であいが始まりました。近くに大きな「ガスタンク」が建っていましたので、それが爆発したと思いました。私は十四才の女学生で、毎日学徒動員で海田の工場で紙箱を作っていました。その日は体調が悪く熱があり家で休んでいました。小学生の妹は、安古市の寺に学童疎開がくしょうそかいをしており、弟は田舎いなかの親戚しんせきに預けられ、生きんがために家族バラバラの生活でした。被爆時、父と母、生後6か月の末の妹と私は玄関において「ドーン」という音を聞いたのです。それからどれ程ほどの時間が過ぎたのか気が付けば、私達は家屋の下敷したじきになり、屋

根や瓦、ガラス、塀が砕け落ちた中にいました。近所の人に助け出され、人の流れに沿って裸足、裸同然の姿で横川から古市方面に逃げました。途中、瓦礫の下から聞こえる呻き声を耳にし、死体で埋め尽くされた川面を見ました。悲惨な状況を見ながらも、家の下敷きになった人を助け出す手伝いをしました。そして二日目にやつとの念いで古市の竹藪に着きました。その日、親戚が探しに来てくれ、持参してくれたむすびで命を繋ぐことができました。

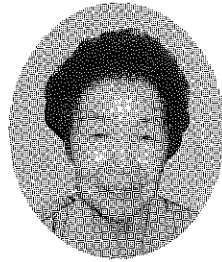
その後、家の崩れた所にバラックを建てて、暮らし始めました。両親は入退院を繰り返して十五年後に亡くなりました。私も多くの学友を失いました。今日、生かされている私達は、核廃絶の為、広島・長崎の被爆市民の苦しみ、悲しみを世界中の人々に伝えて行かなければと思います。

今、舟入むつみ園に入園させて頂き、平穏の内に思うことは、今日までの先人の努力を偲び、悲劇を再び繰り返さないことを祈り続けることです。



八月六日の惨劇 さんげき

清水 美千子（八十五歳）



被爆地……宇品町（爆心地より四・一km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……慢性胃炎・不安神経症・緑内障・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日、当時母親代わりで三十八才の姉と二十一才の私は宇品に住んでおりました。今までB29は上空を通過するだけでした。当日も空襲警報が発令されましたが、すぐ解除になりました。安心して屋内に入ろうと扉に手を掛けた時、一瞬暗くなり大音響と共に強風で扉が飛び散りました。何事かと驚いて屋外に出て、市内中心部方面の空を見ると、最初白煙が上がり、次に黒煙が赤い炎と混じり激しい勢いで拡大して行きました。近所も留守が多く、放送も無く不安なまま時が経ち、昼前になって電車を歩いて、千田町に向かいました。途中には人影もなく、鷹野橋市場に着く頃には、

吹き寄せる熱風の為、前に進むことが出来ず引き返しました。帰る途中、御幸橋から川を見ると、水の流れが見えない位死体が途切れること無く流れて来ました。殆どが制服を着たままの男の子でした。熱風を逃れて川に飛び込まれたのでしょうか。その無残な様子は忘れることが出来ません。帰宅後、町内の建物疎開の動員で出勤しておられた三人の方が焼け焦げた肌に、服の切れ端が付いているだけの裸同然の姿になって、目も焼け爛れて家に着くと直ぐに亡くなれました。このような光景を見ようとは思いませんでした。翌日も御幸橋に行く人と人通りはありませんでしたが、橋の上には死体が山積みでした。見るに耐えず帰りました。被爆後五日経っても報道も無く様子が解らず不安で、東広島の実家に帰ろうと姉と広島駅に行くと列車の窓にぶら下がる程大勢の人でした。七日目まで毎日通ってやっと実家に帰ることが出来ました。田舎でも様々な噂が流れ、広島は百年位草も生えないだらう。原爆の煙を吸った者は長生き出来ないとか、結婚も出来ないとか少なからず差別を受けました。しかし、母親代わりに育ててくれた姉のお陰で結婚し、子供も与えられ、今日まで生きてこられたことに感謝しています。

広島と長崎での二重被爆を経て

下 廣 鳴 海 (七十七歳)

被 爆 地 …… 広島 三篠本町 (爆心地より二・〇 km)

長崎 入市 (八月十五日・岩瀬道町)

当時の急性症状 …… 脱毛・発熱・下痢

家族の死亡 …… 母・妹・祖母

現在の病状 …… 心房細動



被爆時の状況及びその後の生活

戦局が悪化し、^{せんきよく}廣瀬^{ひろせ}小学校高等一年になった私にも学徒動員^{がくとどういん}が出て、七月中旬から三篠^{みささ}の軍靴工場^{みささ}で働いていました。当日の朝「しんどいから休む」という私に「おいしいものを作っておくから」と母に背を押され、四歳の妹から「行つてらっしゃい」と声をかけられ、学校に行きました。校庭には人影^{ひとかげ}が無く、慌て^{あわ}て三篠^{みささ}の工場に向かい、着いた途端^{とたん}、譬^{たと}え^えような無い光が走り、建物^{くず}が崩れ、私は瓦礫^{がれき}の下敷^{したじ}きになりました。幸^{さいわ}いなことに傍^{かたわら}にいた人が助けて下さいました。その時、左腕に材木が刺さり、

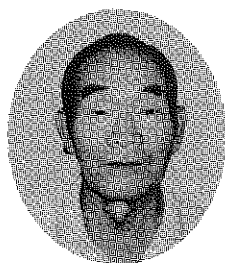
血膿うみが出続け完治かんちするまで二年を要しました。その後、古市方面ふるいちに避難ひなんしました。炎ほのおに包つつまれた我が家の方向を見ながら、母、祖母、妹の名を呼び続けるうちに夜半になりました。私の名を呼ぶ声の方に行ってみると親友の傷ついた姿がありました。手持ちの軟膏なんこうを塗ぬっていると、周囲から「私も私も」と言われ軟膏なんこうはアッと言う間に無くなりました。傷ついた人達の呻うめき声で寝られない一夜を過ごし、夜明けと共に我が家に向かつて歩きました。横川よこがわに來ると道路は黒焦こくしやうげの遺体いたいで足の踏み場もありませんでした。川はまるで人間の筏いかだを流したようでした。燃え盛さかる家の前で子供の名を呼び続ける母親らしき人、本当に生き地獄ひろせでした。そんな街中を飲まず食わずふらふらしながら歩き、八日の朝、広瀬神社の門の所まで來ると、我が家が燃えていました。私は近づくこともできず、ただ見ていただけでした。すると私を呼ぶ姉の声で我に返り、二人で我が家の焼け跡あとに着くと父が会社どうりやうの同僚の方と母・妹・祖母三人の遺骨いこつを探し当てたところでした。

遺骨いこつを安置あんちしておく場所がなく、父の故郷の長崎の墓ふねに安置あんちすることになり、私と姉の二人で三人分の遺骨いこつを持ち、長崎に向かいました。下関で長崎が壊滅かいめつしたとの噂うわさを聞いておりましたが、長崎に着いてみると、そこは広島ひろしまの街と全く同じ瓦礫がれきの原でした。それでも父の言葉を頼りに、三菱造船所みつびしぞうせんじよのドックの上、岩瀬道町いわせどうという地名を

探し当て、三人の骨を安置し終えた時はホツとすると共に涙が頬を伝って止みませんでした。何日もズックを履きっぱなしだったので、足の爪は変形し、歩くのも辛い日々が続きました。以後、六十四年間、鬼の爪と仲良く生きています。

忘れられぬ両親との再会

新 宅 實 夫（七十九歳）



被 爆 地 …… 東千田町（爆心地より一・五km）
ひがしせんた

当時の急性症状 …… 切り傷（左人差し指）

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 糖尿病・高脂血症・不眠症

被爆時の状況及びその後の生活

私は、当時十四歳でした。実家は、現在の安芸高田市でしたが、一人親元を離れ、
こうりょう
広陵中学校に通っていました。

八月六日は、学徒動員として七時頃から残務整理の為、東千田町の地下壕にいました。突然「ドーン」という凄まじい音がし、激しい揺れを感じました。天井のレンガが落ちてきたので、咄嗟に隠れました。私は端にいたので手を切るだけで済みました。が、中央で作業していた人は、レンガの下敷きになっていました。

すぐにここを出なければと崩れた地下壕の中を手探りで、やつとの思いで外へ出ましたが、そこはこの世のものとは思えぬ光景でした。快晴だった空は真つ黒な雲に覆われ、建物は崩れ、市内一面火の海となっていました。

寮がある宇品にとりあえず帰ろうと、瓦礫の中をさ迷いながら歩きました。男なのか女なのか、性別が解らない程、黒焦げになり歩いている人、市内電車の中に黒焦げになり立ったまま亡くなっている人、赤子を抱いたまま亡くなっている母親、無残な光景に持っていたハンカチを口に当て、前に進みました。

なんとか寮に辿り着きましたが、寮の建物は、崩壊していました。行く当てが無かった私は、比治山の川の辺でシートを張り、マットを敷き休みました。二日間は、何も食べなかったと思います。家へ帰りたい、両親に会いたい、そればかり考えていました。

原爆投下から一ヶ月たった九月十日に実家へ帰ることができました。私の生存を知

らなかった両親は、涙を流し迎えてくれました。私も涙をこらえることが出来ませんでした。母は、私を抱いてくれました。あの時の温もりは今でも忘れられません。

私は運良く助かることができましたが、あの時の光景はまさに生き地獄でした。二度とあのような惨事を起こしてはいけなくと強く思います。核のない平和な世界、それが被爆者である私の望みです。

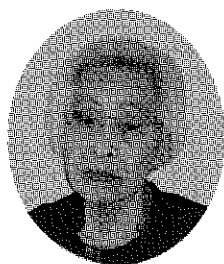


千田町、広島文理科大学の辺り

爆心地から約1420mの東千田町で、当時の広島文理科大学の辺り
(川本俊雄氏撮影／川本祥雄氏提供)

平和な日本を願う

高橋 邑江（八十六歳）



被爆地……救護（湯来町）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……大腸癌・胆石術後・術後腸管癒着症

被爆時の状況及びその後の生活

その日は、数日前より神戸の伯母が具合が悪いということで看病のため伯母の所へ行っていました。八月六日の朝、広島に爆弾が落ちたと聞き、心配になり神戸から帰ろうと汽車に乗り、広島駅に着いた時、夜が明けていないような暗さを見て、腰が抜けそうになりました。広島駅から南側の方を見ると建物がうっすら遠くにしか見えませんでした。とにかく湯来町の自宅に帰らねばと、廿日市に行き木炭バスに乗りました。どうして廿日市にいったのか、今では記憶が定かではありませんが砂谷の我が家に帰ることができた時、ひと安心したことを覚えています。

あくる日、友達の看護婦が来られ、負傷者が大勢運ばれてきているので、負傷者の看病を手伝って欲しいと頼まれました。診療所は足の踏み場も無い悲惨な状態でした。着ている物はボロボロになり、傷だらけで、口も利けない程弱りはてた人が、雨戸の戸板に乗せられて運び込まれて来ました。しかし、手当をする術もなく亡くなられました。子供達は「痛いよう、痛いよう」「お水ちょうだい」と苦しうに言っている姿を見て可哀想で涙が出ました。またある人は、耳から蛆が湧き鼻にはハエが群がっていました。薬をつけてあげようにも消毒液が手に入りませんでした。やっと届いた消毒液で手当をして、家に帰る時、この子供は明日まで駄目かもしれないと思いながら家に帰りました。あくる日行ってみると気になっていた子供は亡くなっていました。とても辛く、悲しかったです。その後も衛生状態や栄養状態が悪く、腸チフスや赤痢に罹った人を隔離して治療しなければならない人が大人、子供を含め、三十人位いました。幸い感染症で亡くなった人はいませんでした。悲惨な広島をみて、日本はこれからどうなっていくのか考えたとしても情けなくなりました。二度とこのような事があってはいけないと思います。平和な日本が続くことを願うばかりです。

友を探して歩いた広島の街

田 中 静 江（八十四歳）



被 爆 地 …… 入市（八月八日・水主町）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 高血圧性心疾患・高脂血症・喘息・動脈硬化症

被爆時の状況及びその後の生活

呉軍港の玄関口げんかんである私達の住む倉橋島くらはしじまには海軍基地があり、山の上には大きな砲台だいがありました。呉攻撃くれに來襲らいしゅうする敵機てききに砲撃ほうげきした後の破片はへんが落下し、まるで戦いの最中さなかにいるような毎日でした。

八月六日の朝は、取り入れたばかりの作物を、男手おとこでの無い我が家では、女・子供が老齡らうれいの父を相手に整理していた時、突然大きな音と共に閃光せんこうが走り、大変驚きおどろ、仕事しごとが手につかなくなりました。暫くして広島の方が大変なことになっていると噂うわさが流れて、村中大騒ぎさわになりました。広島にいる兄たちの安否あんびが気掛かりで消息しやうそくを待ちまし

たが、^{まった}全くの音信不通^{おんしんふつう}の中で七日の晩まで待ちました。連絡がないので、八日の朝、村の人たちが小さい番船を仕立てて、それに便乗^{びんじよう}して父と共に本川^{ほんかわ}の河口^{かこう}まで辿^{たど}り着きました。川の中は死体が筏^{いかだ}を組んだように重なりあつて流れており船が進めませんでした。思わず涙が流れ出て暫^{しばらく}く手を合わせました。船頭^{せんとう}さん達がやつつのことで水主^{かこ}町付近の河岸に着けてくれ地上に上がった瞬間、街の光景が目に入り、身が竦^{すく}んでしまいました。街はすっかり焼け野原になりました、焼け残った建物からは、まだ煙が立ち込めていて、西も東も解^{わか}らず前に進むことが出来ませんでした。



水主町付近の焼け跡

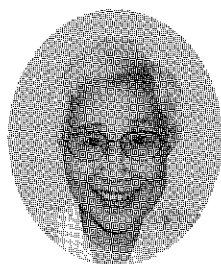
石碑があり、広島県産業奨励館が見える。(米軍撮影／広島平和記念資料館提供)

瓦礫の間から黒焦げの死体が数知れず覗いていて、その中にまだ息のある人が、幽かな声を出して「助けて」「熱い」「水をくれ」と呻いておりました。それを見捨てて通り過ぎなければならぬ時は、何にも喩えようのない辛い思いで手を合わせました。決して水を与えないようにとの布告があつたのです。後になって防火水槽の水でも飲ませてあげれば良かったと後悔しました。その防火水槽の中にも、熱さから逃れようと飛び込んだのでしよう。異様にお腹が膨らんだ死体が水槽からはみ出さんばかりでした。この世の光景と思えない状況の中を、父は兄の行方を追い、私は大恩の有る友人を尋ねて、水主町方面を懸命に探しましたが、爆心地に近かつた為でしよう、消息を得ることも出来ずに帰りました。このことは、今に至るまで私の心の中深く重荷となつています。兄たちは、尾長三本松から山の手避難してましたので無事でした。戦争がもう少し早く終わっていたら、多くの若い人たちが失われずに済んだと思います。

再び戦争が起こらないように、平和が続いていくようにと祈って止みません。

十七歳の一日

豊島敬子（八十歳）



被爆地……舟入本町（爆心地より一・三km）

当時の急性症状……裂傷

家族の死亡……父・叔母・祖母・従兄

現在の病状……変形性腰痛症・白内障・心房細動・慢性胃炎

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日朝、私は舟入本町の祖父の家で玄関の雑巾がけをしていました。

高等女学校卒業後も通っていた軍需工場が当時休日だったので、母の銘仙の着物を解いて作った半袖ワンピースを着て、暑い中、普段どおりにお掃除をしていました。すると、突如、「バギューン！」という轟音と共に、頭の上に天井が落下してきました。その瞬間「広島爆撃」と直感し、柱に掛かっていた非常袋を掴み、壊れた窓から夢中で外へ避難しました。割れたガラスで裂傷を負いながら出てみると、すぐ目の前に屋根があり、屋根瓦の上に上がって見渡すと、一面の埃の中に、つい先程まであつ

た町は無残に崩れ、真つ黒い煙がモクモクと空に昇っていました。

衝撃から三、四分も経っていたらどうか、今迄の町は跡形もなく、全く信じられない光景に変わっていました。苦勞して道路に下りると、崩れた家の中からなんとか脱出してきた祖父に出会えました。祖父の胸のあたりは真つ赤な血に染まっていました。他の家族が心配で、崩れた家の中を覗いて、大声で呼び続けても全く応答がありませんでした。隙間から必要書類や現金など、取れそうな所に見えても、梁や柱、割れたガラス窓等が塞いで入れませんでした。みんなの様子が気になって仕方ないがどうにもなりませんでした。じたばたしているうちに隣家の軒に炎が見えました。祖父が「もう行こう」と言うので気が咎めつつも、やや空の明るい江波方面に歩き始めました。すると、すぐに雨に会いました。黒ずんだ、すさまじい埃の混じった雨でした。江波陸軍病院に辿り着きましたが、たくさんさんの避難者でいっぱいでした。異常な状態に落ち着かず、夜まで休めそうな場所を探しました。ちょうどよく、畑の中にある家を見つけ廊下に横たわらせてもらいました。部屋の中には、同じように避難して来た人々が「熱い、熱い」「水、水」と叫び呻き、外を見ると広島市街は火の海、真つ赤でした。とても、とてもむなしい夜でした。

父は、勤務先で圧死。舟入で同居していた親族五人も犠牲になりました。

子供の無い私は今、舟入^{ふないり}むつみ園で生活させて頂^{いただ}いていますが、原爆は不条理^{ふじょうり}です。絶対に使われてはいけません。

今が一番いい

中 元 芳 江（八十七歳）



被 爆 地 …… 己斐町^{こい}（爆心地より二・五km）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 骨粗鬆症・高尿素血症・逆流性食道炎・

高コレステロール血症

被爆時の状況及びその後の生活

その日は、とても気持ちの良い朝でした。警戒警報^{けいかいけいほう}も解除^{かいじょ}されていました。

前の日に、近くに住む友人の妹さんから、麦をいただいていました。私はそのお礼

がしたくて、友人宅へ向かっていました。使ってもらえれば嬉しいと思い、手作りの壁掛けを持参していました。

ちようど己斐駅の裏にさしかかった所で突然、後ろからもの凄いい力で押されるような衝撃がありました。私はうつ伏せに倒れました。いったい何が起こったのかさっぱり分かりませんでした。あまりにも一瞬でした。しばらく何も考えられませんでした。

ふと我に返ると周りの家がみな焼けていました。私は近くにあつた蔵が陰になり爆弾の熱から助かったようでした。

訳がわからず、それでも家族が心配で急いで己斐本町の自宅に帰りました。周りの家が焼ける中、私達の家は奇跡的に残っており、母も甥も無事でした。そこに従兄も駆けつけてくれ、その時初めて、原子爆弾のことを知りました。皆で逃げなくてはと石内に向いました。必死でした。必死でしたが、何処まで行っても、瓦礫とガラスの破片だらけでした。とても進めず、母の兄の家が山手町にありましたので、そこに向いました。焼け出された人、無残な人の山がそこ中にありました。

大変なことが起こった。広島中が酷いことになった。国が無くなった。そんな風に思いました。

生きていくのに、不安しかありませんでした。生きる希望も何もありませんでした。

た。今こうして生きていることが不思議に思うことがあります。縁^{えん}があつて私は今、原爆養護ホームにいます。皆さんに良くしてもらつて、ありがたいと思います。あの時のことを思えば嘘^{うそ}のように楽しく過ごしています。ふと振り返つて自分の人生を考えてみる必要がありますが、やはり思うのです。今が一番いい、と。



ホームの節分行事

原爆被爆者の六十五年前の苦しい思い出

成 澤 達 雄（六十九歳）



被 爆 地 …… 宇品町（爆心地より四・五km）

当時の急性症状 …… 下痢

家族の死亡 …… 父

現在の病状 …… 腎機能障害・慢性肝炎

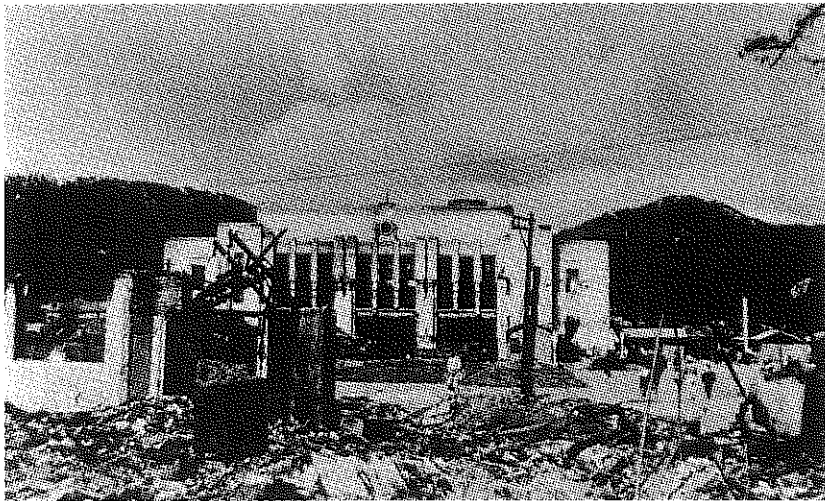
被爆時の状況及びその後の生活

私は被爆時、五歳でした。原爆が投下された時のことは、今でも強く残っておりますが、その後のことは、亡くなった母が話し続けてくれたことを思い起こしながら話させていただきます。

八月六日、父は朝七時に出かけ母は自宅で掃除をしておりました。私と妹は母の近くで遊んでいました。八時を過ぎた時、ピカッと光線が走って、ドカーンとなんともいえない音とともに暗くなり、外は暗闇になりました。しばらくして、明るくなってきました。母が何かを言った時、初めて三人がしっかりと手を取りあっていることに

気づきました。外を見回したら、たくさん
の家が崩れておりました。そこにおら
れる皆さんは方向の定まらない蟻のよう
に右往左往していました。

その後、母は妹を背負い私と手を繋いで、
父を探しに広島駅方面へ行く途中、
千田町では真つ黒になって歩いている人、
顔の皮膚や髪がぶら下がって歩いている
人、眼だけがぎらぎら光って真つ黒にな
って歩いている人、人を探す人、助けを
求める人、水を下さいと呻く人、家の中
から助けを求める人、いろいろな光景に
出会いました。市電は爆風で横倒しにな
り、焦げ臭いにおいもはつきり思い出し
ます。母にしっかりと手を引っ張られて、
熱く、臭く、燃え盛る火の中を歩き回り



広島駅

南から北北東に向かって。爆風で張り出した待合室は倒壊。本体の屋根は押し下げられ変形破損した。(川本俊雄氏撮影／川本祥雄氏提供)

ました。本当に燃える街の中、地獄の中を、父を探して歩いておりました。

的場まてば近くまで来た時、広島駅前が火の粉を渦巻うずいて燃えておりました。その時、私の回りが熱くなつて来るのにいち早く気が付いた母が、私の手を強く握にぎり、火をよけて宇品うしなに帰りました。途中には、電信柱や電線が切れて道を塞ふさいでおり、よけながら歩き続ける中、助けを求める人達に、私たちはどうすることも出来ませんでした。家の前でやっと父と会うことが出来ました。本当にうれしくて、泣いて父の所から離れませんでした。

その後、親子四人で宇品うしなの広場に行きました。大勢おおぜいの人が怪我けがや火傷やけどを負おつて、後ろか前かよくわからない状態の人の介護を懸命けんめいにしておられました。私の父と母も頑張つて手伝つておりました。毎日毎日、人が死んでゆきました。テント生活を一週間くらいし、自宅に帰りました。しかし、昭和二十年八月三十日四時に、父は亡くなりました。父は私たち親子に対して二十四日間のうちに、六十年分の愛情を注そそいでくれたと思います。今でも必ず見守つてくれていると信じています。

祈り

西 ミエコ（八十七歳）



被爆地……南観音町（爆心地より二・〇km）

当時の急性症状……下痢

家族の死亡……なし

現在の病状……高脂血症・肝機能障害・完全左脚ブロック

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日も暑い良い天気でした。主人が敗血症のため医師の往診日（おうしんぴ）で氷を買って帰った時、近所の西田さんが主人の為に牛乳を持って来てくださいました。その時、彼女のおんぶしていた子供さんが「音の違う飛行機が来た」と言いました。三歳なのによく解（わか）ったなど、今もってその時の子供さんの声が耳に残っています。警報解除（かいじょ）の後で気に止めませんでしたが、その直後、牡丹色（ぼたんいろ）の光線が目前を横切ったので慌（あわ）てて夫の部屋に入ると壁が崩（くず）れ、夫が横たわっていた身体を起こしたのと、持っていた新聞に火が付いたのが同時でした。布団（ふとん）の上には廊下（ろうか）の一枚硝子（がらす）が砕け散り天井からは空

が見えていました。私は隣に焼夷弾しょういだんが落ちたと思いました。丁度ちやうどその時、西田さんの子供さんの泣き声で我に返り、シーツを破りやぶ西田さんに子供さんを背負おい直させ帰宅させました。入れ替わりに岡崎さんが子供二人連れ、血を流しながら表門に立っておられましたので、手当をして帰しました。私は組長でしたので隣組の様子を見回ると、屋根瓦は飛び、天井は落ち、表札から煙が出て、電柱は折れ焼けていました。外の景色は一変し一面瓦礫がれきの原と化し、遠くのビルが見えていました。そのような中、負傷者が次々と運ばれてきました。夫も自分の身を忘れて冬瓜畑へ負傷者を運びました。倒壊とうかいを免れた我家には、見も知らぬ人々が次々と来られ、一階は避難者ひなんで一杯でした。なかには数日逗留とうりゆうされる方もおられました。夜になると軒下で寝る人もいましたが、当時の考え方では当然の行為と受け止めていました。近くの小学校で遺体を焼く臭気しゅうきが漂い、家が焼けて倒壊する音に混じって、家族を失って泣く声が夜通し絶えることがありませんでした。

私は、自宅で被爆し、街の中の悲惨ひさんさは見ていませんが、友人から聞くその有様は、正にこの世の生き地獄そのものだとのお話でした。私も黒い雨にもあたりましたが、風評や一生癌がんの発生を恐れて暮すという実状を見る時、被爆で死んだ人も哀れあわれですが、生き残って癌の恐怖と闘っている人も哀れです。

今でも広島いの川や街を見て涙ぐむことがあります。如何なる理由にせよ戦争はすべきでないかと強く思います。

私と家族の八・六

野澤 秋子（八十四歳）

被爆地……東魚屋町（爆心地より〇・七km）

当時の急性症状……下痢・脱毛・発熱

家族の死亡……なし

現在の病状……高脂血症・腰部脊椎管狭窄症状・

変形性膝関節症・高血圧症



被爆時の状況及びその後の生活

その朝、私と母は家の裏に掘った防空壕ぼうくうこうの水を汲み出すため、私が地下に、母が地



西練兵場内の防空壕

西練兵場内に、30㍍所近くの防空壕が掘られた。壕の上とその向こうの兵士は撮影に同行の憲兵か。（川原四儀氏撮影／広島原爆被災撮影者の会提供）

上におり、作業をしている時「秋ちやん出んさんな」と母の声がした途端、閃光が走り、大きな爆発音が上がりました。部屋に通じるドアは開きませんでした。明かり取り用の窓から外に出てみますと髪は土を被り、青白い顔をして立っているのがやつとといった状態で母がおりました。母は飛行機を間近に見たので私と同じ防空壕に入ることのためらい、他の防空壕に入ったそうです。

父は勤め先で建物の下敷きになりながらも抜け出し、身体中、傷と埃だらけになりながら家に帰って来ました。三人で倒壊した家から布団を引っ張り出し、それを被って先が見

えない程の埃ほこりと黒い雨の中を避難ひなんしました。逃げまどう人達の中には、裸同然の姿の人、全身火傷やけどをし、皮膚がめくれて垂たれ下がり、「水をくれ」と言いながら、歩いている人達はこの世のものとは思えない光景でした。ようやく雨が止んだ頃、母の白と紺の格子柄こうしのブラウスの紺色の所から煙が上がっていました。脱いでみますと火傷やけどをしていました。手当の術すべもなく、水を掛けるのが精いっぱいでした。

伯母おばの家では建物疎開そかいに出た従姉妹いとこが帰らないとのことでした。皆怪我けがをして動けませんので私が捜しさがに行くことにしました。心配だからと友人が同行してくれ、二人で捜し廻りまわしました。道々みちみち、何人かずつ中学生が焚き火たきを囲んで校歌を歌っている姿を見かけ、尋ねたずねましたが見つけることが出来ませんでした。結局、従妹いとこは帰って来ることはありませんでした。

被爆後、父は三年後に食道癌がんで亡くなりました。母の背中の火傷やけどは重症で治療する薬とて無い中、傷に蛆うじがわき、取り除いても、取り除いても湧き続ける蛆うじに苦しみ続けました。その結果、長い療養生活りようせうを余儀なくされました。そのような状況下でも下痢りと脱毛とうもうの続く娘を思つて、空気の良い所へ転地療養てんちりようをさせようと親戚しんせきを頼り、九州や鞆とらの浦うらへと療養りように行かせてくれました。

今、母の亡くなった年齢を一つ超え、頑張つて生きたよと心の中で母に祈る日々です。

被爆軍人さんの看護体験

野津田 ハナコ（八十九歳）



被 爆 地 …… 救護（三次中学校）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 慢性虚血性心疾患・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日、広島に原爆が投下され、多くの死傷者が出ました。そのような状況下、負傷した軍人さんだけが、当時の芸備線の列車で三次中学校に、次から次からと送り込まれました。総勢五百人だったと聞いています。当時、私は吉舎に住んでおり、役場の職員として、助産婦をしていました。

まだ結婚前でしたが、双三郡の村々から看護の為に召集された婦人会の人達に交じり、交替で看護に当たりました。中学校の校舎の教室の境の戸を全部外して、負傷した身動きもしない方々を寝かせてある状況は、表現は悪いのですが、魚のメザシを思

わされました。

暑い夏場のこと、傷口が見当たらないような方でも、身体すべの全てに、ウジ虫が這はつており、次から次に出てきました。私は、身体を拭ふきながら、ウジ虫を一生懸命とりました。看護かんごと言ってもこれくらいのことしかできない状況でした。

校庭では死亡された方々を焼いている人、その灰を山へ運ぶ人、校庭だけでは焼けず、焼く為に死体を山に運ぶ人、わずか一日のことでしたが、今も昨日のように思われて、一生忘れることは出来ません。

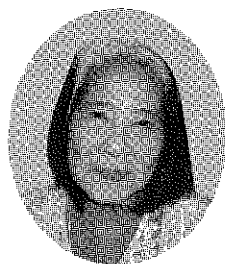
救護後に体調を崩ふすこともなく、今日まで生きてこられたことを思いますと、私は恵まれていたと思います。



ホームの「敬老祝賀会」

十四歳の夏

服部 貞枝（八十歳）



被爆地……三篠本町（爆心地より二・五km）

当時の急性症状……発熱・火傷・脱毛

家族の死亡……なし

現在の病状……右乳癌術後・高血圧症・気管支喘息・

高尿酸血症・狭心症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は祖母が病氣の為、母と二人で母方の里、三篠本町へ行っていました。そこから県立海田中学校へ通っていました。

八月六日の朝も学校へ行く為、一歩家から出た時、ものすごい光と同時に爆音があり家の中へ飛び込みました。一瞬の事で何が何だか分らない状態でした。

家の中は、一間ダンスがひっくり返っていました。窓側の四畳半に寝ていた祖母の所へ行くと、ガラス破片が布団の上や周りいっぱいには散らばっており、ガラスの上で

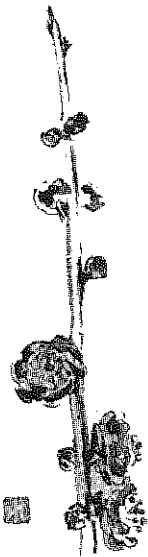
寝ているようでした。母と二人で布団ふとんのガラスを取り、玄関に置いてあつた担架たんかへ祖母を寝かせ、母と様子を見に来ていた叔母おばと三人で、三滝みたきの方へ逃げました。

逃げる途中、怪我けがをした女性に足首を掴つかまれ、その力は前に進めない程でした。その人は「水を下さい」と言つて、私の足首を放はなしてくれませんでした。

向こうの方では、軍の人たちが「水をあげたら死ぬぞ」と言つていたので、その女性の手を振り切つて一生懸命に逃げました。周りには手を前に出し、腕には皮膚と洋服が焼けて、ぶら下がった状態で歩いている人達が沢山たくさんいました。そんな中、私は見えて見ぬふりをし、一生懸命に逃げました。凄くすこ心苦しかったです。今思うと、一滴のお水でも口の中へ入れてあげれば良かったと、悔くいが残ります。

その後、私は女学校へ進学し、英文科を専攻しました。そして、こんな酷むごい事をするアメリカ人は、どんな人種なのか学びました。そこで学んだことは、アメリカ人も人で私達と変わらない人間でした。悪いのはアメリカ人では無く、戦争が人を変えてしまい、全てを奪うばい去さつたということです。

戦争は二度と、あつてはならないことです。



忘れられない八日間

原 田 春 枝（八十六歳）



被 爆 地 …… 救 護（久地小学校）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 高血圧症・脳梗塞後遺症・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

私は、当時二十一歳でした。お嫁に行く前で家族の手伝いをしていました。

この日は、久地くち小学校の近くにある役場へ国保婦人会に母が行けない為、私が代わりに行く途中でした。

上空から「ピカッ」と光った時に空を見上げると、落下傘らっかさんのような物が落ちてきて、

周りが暗くなりました。恐ろしくなり防空壕ぼうくわうへ行こうとしたら、役場の主任から小学校へ避難ひなんするように言われ行きました。

しばらくすると、広島から傷ついた人達がトラックに乗せられて次から次と運ばれ

てきました。

私は婦人会の方々と手当をさせてもらいました。お医者さんや看護婦さんもおらず、薬も無いので赤チンやけどを火傷の所に付けていました。大変な大怪我けがで手当に戸惑とまどいましたが生懸命つと努めて参りました。

「苦しいよ、苦しいよ」と呻うなっているので話も聞き取れない状態で「水が欲しい」と言われていても、水を飲ませたら死んでしまうと聞いていたのであげられませんでした。うちわで扇あおいでも、すぐに傷口に蛆虫うしが沢山たくさんわき出し取り除のぞくのですが、間に合わない状態でした。学校の校舎に入りきらず亡くなられた人を運動場で油をかけて焼いていました。次から次に亡くなられ、大変な思いをしました。二十名の婦人会の人数で、交替しながら八日間お世話を続けました。怪我けがの状態が少しでも良くなった方は、トラックに乗って病院へ代わって行かれました。

昭和二十一年九月に結婚して稲荷町いなりに住むことになり、あまりの広島ひろしまの悲惨ひさんさに驚おどろきました。子供に恵まれず、主人とは死別いたしました。一人暮らしをしていましたが、不安と寂さびしさのため、むつみ園に申し込みました。

入園することが出来て今はとても幸せです。

焼けた街

平城 美代子（八十六歳）



被爆地……東觀音町（爆心地より一・五km）
当時の急性症状……首の裂傷
家族の死亡……中学生の弟
現在の病状……糖尿病・高血圧症・高脂血症

被爆時の状況及びその後の生活

六日の朝、父は仕事、上の弟は中学校へ、母と下の弟は己斐へ出かけ、私が仕事を休んだ以外はいつもと変わらない朝の始まりでした。

私一人家にいると、警報が鳴り、逃げる用意をして玄関に向かうと警報解除になり、どうしたのかなと思った瞬間、青白く、そして赤っぽく、オレンジ色のような眩しい光が目に入ったかと思うと物凄い轟音と爆風に合い、一瞬にして家の下敷きになり柱で体を押さえられ、全く自分では身動きのとれない状態でした。私は、必死で助けを呼びましたが、誰も足を止めてくれる人は無く、このまま、ただ、死を待つのかと思

っていました。すると「美代子」と叫びながら父がもどり、私を助けだしてくれました。私は気が動転していたのか、首の皮が捲めくれていることに全く気付きませんでした。痛みは有りましたが、熱風と火から早く逃げることでだけで必死でした。

広島いつしもんの街は一瞬にして焼け野原で瓦礫がれきと死体で本当に生き地獄でした。母と下の弟は己こ斐で助かっていましたが、上の弟はどこで亡くなったのか分からず、父と骨を探しに歩きましたが見つかりませんでした。その後の生活はとても苦しかったです、家族全員で弟の事を思いながら一生懸命生きてきました。

本当に恐ろしい原爆、二度と同じような思いをしたくはありません。絶対に繰り返さぬよう今を生きる人たちに伝えたいと思います。



原爆被爆体験記

平田 敦子（七十八歳）

被爆地……入市（八月七日・宇品町）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……狭心症・高血圧症・総胆管結石・

変形性脊椎症・骨粗鬆症



被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は、広島女高師付属山中高等女学校二年生でした。学友三百人と共に、雑魚場町（現在の国泰寺町）に建物疎開の勤労奉仕のため毎日通っていました。

私はその時、寄宿舎に住んでいましたが、戦争が激しくなり江田島の実家に「大淀」という巡洋艦の将校さんが十人程宿泊されておられ、将校さんから「広島に新型爆弾を落とすという情報が、軍に入っているから娘さんを早く連れ帰る方が良い」と話されるので、母は急いで私を迎えに広島に来ました。その時、母は、同じ学校に通って

いた仲良しの従姉妹も連れ帰るように伯母に話しましたが、伯母は、江田島から広島まで三時間掛かることに難色を示し、従姉妹を寄宿舎に迎えに来ませんでした。八月六日は月曜日で、登校するため江田島から船に乗りました。当時の船は秘密保持のため窓にはカーテンが掛けてあり、外を見ることが出来ませんでした。その日、私の乗った船は宇品港の手前でそのまま引き返しました。私は、翌朝、船に乗り学校へと向かいました。宇品から東千田町の学校まで徒歩で四十分の道程の間に見えた光景は、河には死体が一杯浮いて、それを兵隊さん達が棒で河岸に引き揚げ、土手や橋の下で屍を焼いていました。街の光景は一面倒れた家が焼けて燻っていました。学校に着くと中国地方一を誇っていた体育館は残骸だけを残して、校舎も寄宿舎も焼けて山中先生の石碑だけが残っていました。石碑の前で生き残った同級生四五人で抱き合つて泣きました。

それから従姉妹を捜して収容所を回り、日赤病院で見つかりましたが、全身火傷でした。声をかけても蚊の鳴くような返事でした。その時に体育の平井先生が水をくれと言ったので水筒の水を飲ませましたが、少し経たらもう亡くなっていました。伯母に知らせて従姉妹を担架に乘せて島に連れて帰りましたが、毎日火傷のガーゼを変える時に痛がる声が今も耳から離れません。それから一週間して亡くなりました。三

百人の同級生は、二百六十人が亡くなりました。戦争は如何に多くの犠牲者を出し、得るものは何も無いかを痛感しました。

私の八月六日

藤 一二三（八十一歳）



被 爆 地 …… 段原東浦町（爆心地より二・〇km）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… 弟

現在の病状 …… 高血圧症・高脂血症

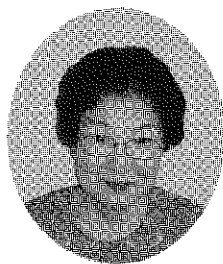
被爆時の状況及びその後の生活

私は、当時中学生で連日学徒動員のため、横川方面へ行っていました。八月六日は友人と待ち合わせて学校へ行くことにしていましたが、私は支度が遅くなり、待ち合

わせた電車に乗らず歩いて学校に行きました。学校の二階の窓から外を眺めていると、何とも言えない光と音がしました。驚いて廊下に出て、皆と重なり合うように伏せ、頭を押さえた途端、天井が崩れ、窓ガラスが粉々に飛び散りました。混乱の中、先生の指示があつたのかどうかも分らず、気がつく和我が家に向かつて歩いていました。その途中、中学生らしき男の子が、火傷の為、頭から足の先まで、皮膚がめくれ垂れ下がった状態で「どうしたらいいか」と私に聞きました。「私も家に帰る途中です。あなたも帰りましょう」と声を掛けました。段原東浦町の家に戻ってみると家は倒壊し、両親も見当たりませんでした。妹が頭を負傷して、医者を探しに行ったとのことでした。どこにも医者がおらず、やつと海田で診てもらい妹は一命を取り留めました。家には住めませんので府中の親戚を頼って行きましたが、家が狭く、近くの山に蚊帳を張り二晩過ぎました。弟は、学徒動員で雑魚場町で被爆し、再び帰って来ることはありませんでした。骨すらも残っていませんでした。このような状況の下でも悲嘆に暮れている暇は無く、生活に追われる毎日でした。五・六年経ち、甲状腺が腫れ、ABC C（現放射線影響研究所）で三ヶ所手術を受け、無事今日まで生き永らえることが出来ました。今振り返ってみますと、あの瓦礫の中でよく助かり、生きられたと思います。私を支えて下さった多くの方々に感謝しています。

怖く悲惨な原爆

藤 廣 チエ子（八十四歳）



被 爆 地 …… 入市（八月七日・猿楽町）

当時の急性症状 …… 湿疹・菌茎の出血

家族の死亡 …… 母

現在の病状 …… 骨粗鬆症・高脂血症

被爆時の状況及びその後の生活

私は当時、仁保町丹那の教育船舶兵団司令部に勤務しており、八月六日は朝礼で野外に集合していました。すると、突然「ピカッ」と青白い光に全身を包まれた気がして一瞬何が起きたのか解らずポカーンとしてっていると、屋内に入るよう指示があり、急いで部屋に入った途端、建物全体にズシンとショックがあり、窓ガラスが割れ、書棚が倒れ、驚いて机の下に潜ると同時に静かになりました。傍におられた軍人さんが「相当大きな爆弾が近くに落ちたんだろう」と言われ私もそうだろうと思い、散乱した書類等の片付けを始めた時、軍医さんから手伝いの依頼があり行きますと、大勢の

負傷者がトラックで運び込まれていました。殆どの方が衣類はボロボロに破れ、皮膚は火傷で剥れた状態で横たわっておられました。何処で何があつたのか聞いても瞬時の出来事で答えることが出来ない始末。ただ、「水が欲しい」と言われるばかりでした。水は与えないように言われていましたのであける事が出来ませんでした。私達に出来たのは、食用油を火傷に塗ることだけでした。傷ついた方々は、時間と共に次々と息を引き取られて行きました。その日は食事も喉を通らず、水をあげられなかったことが悔やまれ「ごめんなさい」と心の中で言い続けました。夕方になり上司から広島は大火災になっているので、今晚は此処に泊まるように言われました。

翌日、広瀬町の我が家に向かい御幸橋まで来ると街中に屍が累累として、一晩で燃えつきた街の空気はムンムンとして、足元には残火が燃えており、歩ける処は電車通りだけでした。それでも必死の思いで歩き、相生橋まで辿り着き、家の方向を見ると一面瓦礫の原です。私は一度に力が抜け暫く立ち竦んでおりましたが、氣を取り直し再び我が家に向かい歩きました。辿り着いて見ると我が家は跡形も無く焼けていました。母はどうしたのかと方々捜していると天満川の河原に避難していました。私達は再会を喜びあい、無傷の母を見て一安心し、当時の教育に忠実に再び職場へ急いで戻りました。

終戦となり、初めて母のことが気になり家に帰ってみますと、母はすっかり弱っており一ヶ月足らずで亡くなりました。私は悲しみを堪え、自分の手で母を河原で茶毘に付しました。その後、私は全身の湿疹と歯茎からの出血が止まりませんでした。が、幸いにも衛生兵だった兄が復員し、調達してくれた薬品で元気を取り戻しました。

人を人とも思わないような戦争は二度とあつてはならないと思います。再び核兵器が使われることの無いように願って止みません。

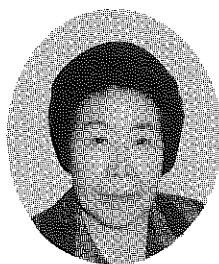


相生橋

広島県商工経済会（本川左岸上流側）から西に向って。手前レンガの折り重なった瓦礫の部分は広島電鉄橋下変電所、この変電所は損傷がはげしく復旧することはなかった。（川原四儀氏撮影／広島原爆被災撮影者の会提供）

消せない記憶

松 永 二 葉（七十六歳）



被 爆 地 …… 救護（石内のお寺）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 高脂血症・気管支喘息・頸椎狹窄症

被爆時の状況及びその後の生活

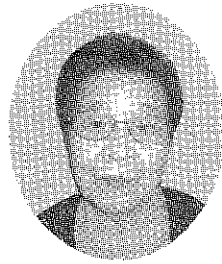
原子爆弾が投下された日、私は石内国民小学校の六年生でした。いつも通り八時から朝礼があり、二階の教室で授業が始まっていました。とその時に晴天の空に今迄見たことも無い虹のような、言葉では言い表せない閃光が「ピカー」と広がって、私はびっくりして眼が眩みましました。間もなくして、大きな音と共に「ドーン」と恐ろしい爆音が響き、教室が大きく揺れました。その時自分の体が大地の底に叩きつけられたような感覚で、急にお腹が痛くなって床に伏せておりました。気がつくとは広島側の窓ガラスが全て粉々に碎け散って、教室では窓側に座っていた男の子の一人が割れたガ

ラスの破片が頭や顔に突き刺つて「イタイ、イタイ」と泣き叫んでいました。私は男の子の額からガラスを抜こうとしました。すると、自分の指先から血が出たのを覚えていました。先生の指示で裏山の防空壕に裸足で急ぎ全員避難しました。二階の階段を我先にと走つて降りていると、隣の五年生の教室から教員をしていた母の大きな声がし、転ばないで裏山に行きました。間もなく空が急に暗くなり、ドロドロした油の混じった大雨が降つて来ました。ブラウスが点々と黒く染まり「気持ちが悪いね」と、顔を見合せながら黒く染まりかけている手で顔をふいておりました。雨がやんで、下級生とそれぞれの方向にスクラムを組んで帰りました。

県道を歩いていると、衣服がボロボロに破れた人がいました。広島市内から己斐を越えて、負傷した人達が学校近くのお寺に運ばれたそうです。母は他の先生方といっしょに救護に行き、夜遅く帰宅しましたが、負傷者の何人かは衣服がボロボロに破れ、手などはじやがいもの皮をむいたように垂れ下がっており、まるで地獄の中にいるようだったと祖母や私達に泣きながら話しました。私は、近所の人達と炊き出しのむすびを子供ながら、一生懸命に手伝いました。山の向側の広島市内は火の海で真っ赤に染まっているのを見て、「今にもうなり声が聞こえて来るようね」と話しました。三日三晩空が真っ赤でした。その時の子供心に怖かったことは、今でも忘れることはできません。

私が見た原爆被爆者

村 尾 伊津美（七十八歳）



被 爆 地 …… 救護（三次^{みよし}高等女学校）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 高血圧症・脑梗塞後遺症・甲状腺

機能低下症・膝関節症

被爆時の状況及びその後の生活

当時私達は、三次^{みよし}高等女学校の一年生で姉と共に通学しておりました。学生とは名ばかりで、戦時下では、何一つ学ぶことはできず、毎日、勤労^{きんろうほうし}奉仕で農作業の手伝いばかりの日々でした。

そのような状況下で、八月六日を迎えました。統制下で情報も何も無い中、もちろん子供の私など何を知る術^{すべ}もありませんでした。ただ、大人の人達の「広島が大変じやそうな」「広島は全滅^{ぜんめつ}じやそうな」と言う噂話^{うわさ}のような僅^{わず}かな知らせだけで、翌七

日から、学校の指示で芸備線山ノ内駅に集合し、被災した方々が列車で運ばれて来られたのを戸板の担架に乗せ、私達の学校の裁縫室や講堂に運びました。大勢の人で、あつという間に学校は病室と化しました。負傷した人は、傷が化膿して、何とも言い難い臭気を放ち、眼だけがぎよろぎよろとして、着衣は皮膚と一緒に垂れ下がり、一部白く見える所がありました。よく見ると蛆がわいていました。また、蛆虫かと思えば、肉が削ぎ取られて骨が白く見えていました。痛々しい姿に、不憫な思いが募り、なるべく痛みの無いように担架に移してあげたいと思つても、焼け爛れておられるので、何処を支えれば良いのか解りませんでした。皆さん水を欲しがりましたが、水を与えないよう指示が有りましたので、一杯の水もあげることが出来ませんでした。私は、心の中でお経を唱え続けました。

八日は、次々と亡くなられる方を裏山に井桁に積み重ねて、茶毘に付すのお経を唱えながら見ていました。このような状況の中、十日程お手伝いをしました。

今、私は原爆養護ホームに入所し、当時を振り返ります時、二度とこのような悲惨な戦争をしてはならないことを、若い人達に語り伝えていかねばならないと思つています。

多くを奪った原爆と、反面受けた愛

森 田 ヨシエ（八十九歳）



被 爆 地 …… 舟入川口町（爆心地より二・〇 km）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… 夫・母・姉

現在の病状 …… 大腸癌術後・高血圧症・骨粗鬆症・腰痛症

被爆時の状況及びその後の生活

その日は普段と変わらない朝でした。七時三十分頃慌ただしく、仕事に行く夫を玄関前で見送りました。その後、私は二歳になる息子と二人、玄関前の家の陰（かげ）になるところで、薪（まき）の整理をしていました。息子の様子を横目で見ながら、また、当時私は妊娠（しん）五カ月ということもあり、整理には時間がかかりました。

もう少しで整理が終わるという時、目の前がピカッと光り、大きな音とともに私達の家はすべて崩れ落ちました。私はすぐに息子を抱き寄せ、辺りを見渡すと、道の向い側にある消防署の二階で、人がぶら下がっているのが見えました。これは大変だ

と思いました、何が起こったのかも分からず、しばらく座り込んでいると近くで働いていた夫が帰ってきました。夫は背中が火傷やけどでするむけの状態で「ここにいては駄目だから大事な物を持って出る」と言ったのを今でも憶おぼえています。

私達家族は、江波方面えばへ向かって歩き始めました。火傷やけどを負ったたくさんの人が、私達と同じように電車道を歩いていました。私達は、途中、知り合いの家にお願おいして、避難ひなんさせてもらいました。そのお家の方も、奥さんが火傷やけどで重傷じゅうしょうを負い大変な状況でありましたが、快く私達を受け入れて下さいました。家に入ってすぐ夫は倒れ、起き上がることも出来なくなっていました。何とか痛みを和やわらげてあげたいと思いました。冷ひやすぐらいしか手当て出来ず、八月九日、そのまま夫は死んでしまいました。

八月十五日、西条さいじょうにいた一番上の姉が訪ねてきました。姉から、母の死、二番目の姉の死、そして終戦になったことを聞きました。

それからの私は、能美のうみにある叔母おばの家を訪ね住まわせてもらい、生きていくのに毎日精一杯でした。そんな私に、叔母おばの家族はとても良くして下さい、よく身重みおもの私を氣遣きづかってくれました。その家族の温もりが、原爆により絶望と不安な気持ちで氷こっていた私の心を、少しずつ溶とかしていつてくれたように思います。

今日があるのは、親切にして下さった皆さんのお陰だかげと心より感謝しています。私から多くを奪うばつていった戦争、原爆投下が二度とないことを祈っています。

四本の橋を渡った八月の暑い日

森 山 静 子（九十歳）



被 爆 地 …… 宇品町うしな（爆心地から三・〇 km）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 狭心症・糖尿病・高血圧症・

高尿酸血症・脊柱管狭窄

被爆時の状況及びその後の生活

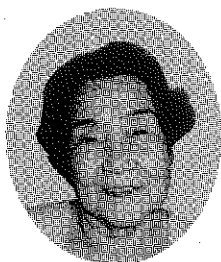
当時私は二十五歳で、宇品の糧秣支廠りようまつししょうで事務員をしておりました。忘れも致いたしませ
ん。

その朝、工員さんが事務所に来られ、下駄が欲しいと言われ、倉庫に向かう途中、あの光を浴びました。外傷は何も有りませんでした。後で気付きましたが、まつ毛だけが焦げていました。糧秣支廠が宇品だと言うこともあり建物、職員には異常は無く、避難者が来るということもありませんでした。私達は、夕方まで工場内の防空壕に避難していました。夕方になり帰宅しようにも電車が動いておりませんので、御幸橋から鷹野橋を経て南観音の我が家を目指して歩きました。そこで遭遇した光景は、この世の物とは思えない有様でした。土手には焼け爛れた死体がずらりと並べられ、建物は焼け崩れ瓦礫の原と化していました。私は、初めてみた光景に身体が震える程の痛みを感じました。ただ、帰らねばという思いだけで、瓦礫を踏み締めて我が家目指して歩きました。やつとの思いで辿り着いた我が家は物の見事に崩れ、一步も中には入れませんでした。しかし、古江に行っていて無事だった母は左腕に火傷を負って、長い間蛆虫が湧く程、大変な思いはしましたが、父もおり、次の日には学徒動員に出て、心配していた妹も帰って来ることができ、家族が無事だったことを感謝しました。数日後には崩れた家の材木でバラックを建て、生活を再開することができました。しかし、父も母も被爆後十年程で亡くなりました。今、私は九十歳になり、むつみ園で同じ体験をした方達と生活しています。

二度と原爆が使われることの無いよう、願って止みません。

被爆の悲惨な思い出

山田 菊江（九十一歳）



被爆地……松原町（爆心地から一・七km）

当時の急性症状……下痢

家族の死亡……養父

現在の病状……慢性気管支炎・発作性心房細動

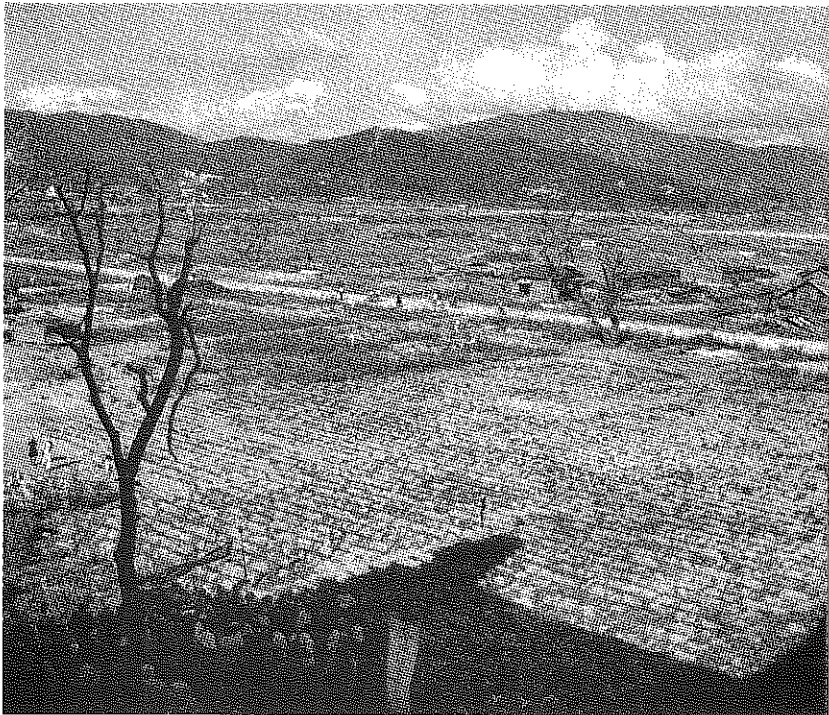
被爆時の状況及びその後の生活

八月六日、それは、今まで生きて来た日々の中で最も忌む怖い日でした。当時、私は、松原町^{まつばら}の食料営団に勤めていましたが、自転車が必要な為、養母のいる公設市場に行った時でした。光線が射したと同時に地面に伏し、暫くして眼を上げますと、辺りには火傷^{やけど}で手の皮膚が剥がれ、下にぶら下がっている人が大勢いました。初めて

見る光景に驚き、養母のことが心配になり家に行つてみますと、ガラスの破片が全身に刺さり血だらけでした。痛がる養母を二葉の里の練兵場に連れて行き手当を受けました。その道中にも、死んだ人、傷つき救助を求める人の波でした。そして皆さん一様に「水をください」と言われました。当初、私は山水を酌んで飲ませてあげました。後に水はあげないようにとの指示が出ましたが、水を飲んだ人はいいといと喜んで下さいました。

三日経つても、仕入れのために十日市に行つた養父が帰つて来ませんので、養母と二人で捜しに行きました。男とも女とも判らない黒こげの死体、眼球が飛び出し、腹が裂け、腸が飛び出た人、累々たる屍を見つ、相生橋まで来た時、ふと、この一群の中に養父がいるのではと思ひました。じつと見るとうつ伏せになつた真つ黒焦げの死体に目が釘付けになり、養父だと思ひました。養母が仰向けにしてみますと、伏せていた顔面は火傷を免れて養父と確認することができました。丁度その時、本願寺の僧と出合い、お経を上げて下さいました。養父を茶毘に付し遺骨にした時、この不幸の中にあつても、心に慰めを受けることが出来ました。養母は被爆七年後に亡くなりました。戦中戦後は本当に悲惨そのものでした。今は一番幸せな時です。感謝の内に過ごさせて頂いております。

むつみ園入所後は、規則正しい生活の毎日で、体調も良くなり、本当にありがたいと思っています。これからも命ある限り一生懸命生きていきます。

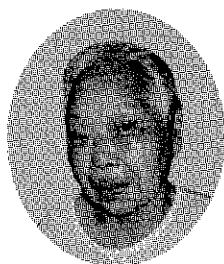


東練兵場

爆心地から約2300mの当時の東練兵場。後方の山、手前二葉山、その後方はゴザソウ。
(川本俊雄氏撮影／川本祥雄氏提供)

運命の一日

山根 敏 江（七十八歳）



被爆地……昭和町（爆心地より二・〇km）

当時の急性症状……火傷（背中）

家族の死亡……なし

現在の病状……腰痛症・肝膿瘍・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

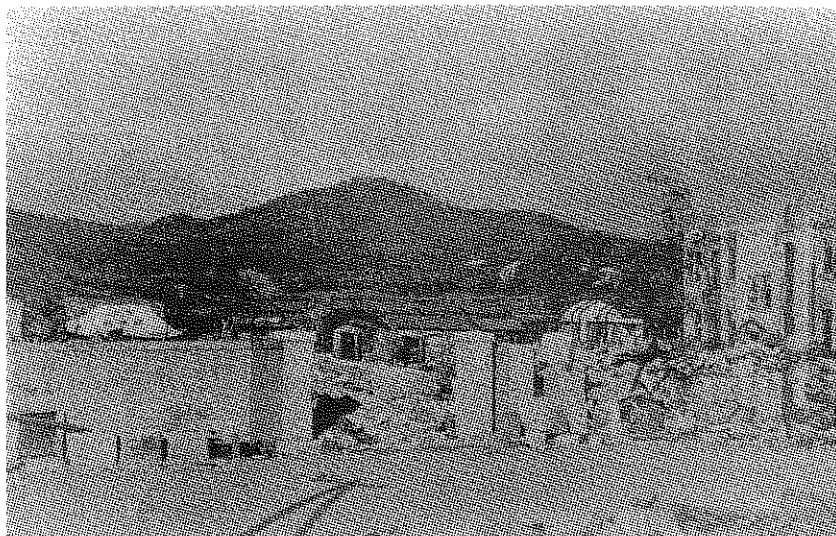
運命の日、当時鉄道郵便に勤めていた父は折から仕事で岡山に行つて不在、弟はすでに学童疎開で比婆郡の山奥に避難しており、牧場の自宅には母と十三歳の私だけでした。私はいつものように学徒動員に出かけました。比治山橋の袂に八時に集合し、あの日は建物疎開で壊した建物の片付けの為に他の学友達とそれぞれ散会していきました。作業が始まって間もなく、その瞬間は訪れました。共に来た学友達はパニックで散り散りになってしまいました。何が起きたか分からない私はその場に立ち竦んでいました。もの陰にいたからか、幸いにも背中に負った火傷は軽く済みました。

しかし、周りはいたる所で火災が起きていました。そこに皆を探しに来た先生が「火の無い段原方面へ逃げなさい」と指示してくれました。避難の最中、火傷が熱く冷やそうと川に入ろうかと思いましたが、すでに同じように多くの人が川にいたので、これでは這い上がれないと思い留まりました。今思えば正しい選択でした。

やつとの思いで練兵場の向いにあつた松本工業高校（現在の瀬戸内高等学校）までたどり着きました。多くの避難者の中、水とパン一つを口にでき、疲れきつた身体を休めることが出来ました。周りでは一晩中呻き声が聞こえ、朝までには幾人か息絶えていました。

夜が明けて、家族で決めていた避難場所である馬木の親戚宅を目指し歩きました。すると中山の踏切でいち早く避難出来ていた母が私を探しに来たところに再会出来ました。的場の自宅の辺りも倒壊、火災に遭つたものの母は幸い大した怪我もしていませんでした。

馬木に避難して私達には大きな急性症状も出ず、一か月程して私の火傷も癒え、弟も疎開から戻り、元の的場にバラックを建て一家でまた暮らせるようになりました。親戚や近所の人々の多くを失い、悲しみに暮れながらも私たち一家は揃つていたのでこそ戦後の苦難を乗り越えることが出来ました。



広島県松本工業学校の正門

爆心地から2950mの広島県松本工業学校の正門を西南から北東に望む。右の建物は講堂か？背後は尾長山。（川本俊雄氏撮影／川本祥雄氏提供）

様々な偶然や導き^{みちび}があつて今の私があると思いますが、次はどうなるか分かりません。戦争は二度と起きて欲しくはありません。あの日のような出来事が、いつ何時も起きてはなりません。偶然はいつも起こるものではないのですから・・・。

無差別殺戮の戦争の惨さ

山 本 チヨノ（八十七歳）



被 爆 地 …… 古田町古江（爆心地より三・六km）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 慢性虚血性心疾患・C型肝炎・高脂血症

被爆時の状況及びその後の生活

その当時、私は両親と姉の四人で古江に住んでいました。朝八時過ぎ、ものすごい爆音と爆風で、土間の前で飛ばされて、恐ろしさに防空壕に逃げました。音が聞こえなくなると家に帰ると、建具類が倒れていました。暫くし、手も付けられない状態です。母と姉が帰って来ました。二人共、田の中に腹這いになったと言って泥だらけの有様、程無く、遠い山畑から父も帰って参りました。電気も水も出ない有様で近所のお宅で井戸水を頂いて昼食の準備をしました。

沢山の被災された方々が、裸同然の姿で逃げて来られましたので、私は、町内の方

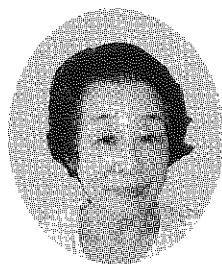
々とご飯の炊出しをし、治療院に収容された人達のお世話を致しました。小さな、まだ小学生と思われる子が、裸足で歩いて来ていましたが、泣くことも忘れる程、心も身体も傷ついて、一言の言葉も出ず、放心状態の子供を見た時、気の毒で言葉もございませんでした。よくぞ八月の灼熱の太陽の中を歩いて来たと、私は涙が止まりませんでした。そして、元氣にしてあげたいと思ったものでした。あくる日、治療院に行きますと、其処にはあの子供の姿はありませんでした。幼く、若い命は、両親にも看取られること無く、淋しく世を去っていったのです。戦争の惨さです。

今、私はこの回顧録を書くことを通じて、親のいなかったその子供に、いくらかでも親のつもりで見てあげただろうかと、胸迫るものを覚えるのです。そして、戦争だけは決してしてはならないとつくづく感じております



母へのレクイエム

吉村 壽子（七十五歳）



被爆地……草津南（爆心地より四・一km）

当時の急性症状……足の火傷・嘔吐・下痢・発熱

家族の死亡……母

現在の病状……高脂血症・高血圧症・腰痛症

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日、私は十二歳で、当時、荒手（現在の草津南）に疎開していました。この頃は、中学生になると学徒動員に招集、一般人は、当番で建物を壊す作業に駆り出されており、丁度この日、母が当番でした。むしの知らせだったのでしようか。当時、一歳二カ月の妹に乳を含ませては玄関に出て、又帰り、再び乳を含ませるといった行為を三度、繰り返した姿は忘れることができません。三度目の乳を含ませた後、暫く妹を抱き、あやした後、天満町に行くと言って行きました。見送った後姿が母の元氣な最後の姿でした。天満町に行くと言っていましたのでその方向を見た途端、大きな音と

共に、空が真つ赤になり、暫く目が見えませんでした。家のガラスは全部壊れ、屋根瓦は落下し、家具も全て倒れ無残な状態でした。暫くして父と丘に登り、街を見ますと火の手が少し弱まったので、母を探しに出かけました。ただ、父の背と足下のみを見て歩くだけでしたので、途中の記憶が不鮮明ですが、人で溢れていたのを憶えています。火が至る所で燃えていましたので、父の後を追うのがやっとでした。天満川に着くと川の中は裸に近い人々で溢れ返っていました。二人で川の中に入りますと、皆一様に「熱い」「水」「助けて」と叫んでいました。この頃になると少し余裕ができ、状況把握ができるようになっていました。「お父さん」と小さな声が聞こえました。母の声でした。私たちはやつとの思いで母を河岸まで寄せましたが、全身火脹れの母を二人で川から引き上げることは出来ませんでした。己斐の母の里へ取って帰り、大八車で父と伯父が迎えにきました。直後、伯母が私の足の火傷に気付いてくれました。その途端、私は氣を失い、一ヶ月半程は立ち上がれず、傷口からは体液が流れ出て、布団が三枚駄目になったそうです。家に連れ帰った母を、離れに寝かせました。決して母を見てはいけないと言われていましたが、母恋しさに行きますと、頭から額にかけて割れていました。私は母の顔に触れることもできず、手だけを撫でました。するとか細い声で「恵美子を頼む」と言い残し、七日目の朝、母は逝ってしまいました。

この時の母の姿が、私の心に大きな傷跡きずあととなりました。母が最後まで氣遣きづかっていた私の黒くなっていた足は、今では色が抜け白くなっています。母親の代わりに育てた妹も四十歳で亡くなりました。

私は今、母や妹も含めて、原爆の犠牲ぎせいになった方々に鎮魂ちんこんの思いを込めて、天満川てんまがわを見つめつつ日々送らせて頂いたいています。

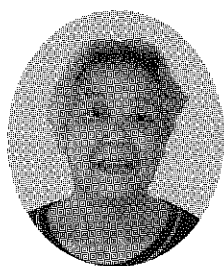
合掌がっしょう



ホームの「ひなまつり会」

人生の出発点で出会った惨劇 さんげき

和久野 富 枝（八十三歳）



被 爆 地 …… 舟入川口町（爆心地より二・〇km）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… 叔母

現在の病状 …… 高血圧症・喘息・結核（治療済）

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は夫と生後四カ月の息子の三人で舟入川口町に住んでいました。その日、夫は出勤前で仕度したくをする為、私は息子のおむつを取り替える為に床間なな続きの十畳の部屋にいた時です、ゴォーという大きな音がして、埃ほこりと共に天井が斜めになって落ちて来ました。ものすごい埃ほこりの中、暫くは何も見えませんでした。庭の光がぼんやり射し込むようになって、自分たちは天井が落ちてトンネル状になったその中にいることがわかりました。何事が起ったのか判らないまま、庭から本川ほんかわの土手どてに出てみますと、川に人が浮いていました。驚おどろいて表通りに出ますと、手袋を脱いで指先に引っかけたよ

うに手の皮がぶら下がった人が、江波方面に向かつて歩いていました。ただ事ではないと思ひ準備していた避難用具を身に付け、以前から取り決めていた高須の家に避難しよう、と、天満川に胸まで浸かつて渡りました。今思うと偵察機だったのでしよう、飛行機が一機飛んで来ました。その時は、ただ、恐ろしいばかりで目の蓮畑の蓮の葉を被つて伏せ、やり過ぎ、次の福島川も胸まで浸かつて家に辿り着きましたが、誰もいませんでした。妹が通う鈴が峰の女学校に行き妹の無事を確認し、高須へ引き返しました。翌日、己斐小学校に人が集まっていると聞き行ってみますと、校庭には死体が井桁に積み重ねてあり、命のある人は講堂に寝かせてありました。看護する人が足りなくて、私も手伝うような言われ、頭が割れた人の傷口を開いて、赤チンを塗りました。今思うと、非常時の体制に慣れていたのでしょうか、悲しいとも、苦しいとも、情け無いとも思わず、どのような状況も深刻に考えること無く、何時まで続くのだろうくらいにの気持ちで全てのことをやり通してきました。

母や弟達と一週間後に、母の出身地の甲立で会うことが出来ましたが、母と共に住んでいた叔母は、土橋に勤労奉仕に出ており、帰って来ることはありませんでした。

二年後、被爆者名簿が公開された時、叔母の名前が記帳されていました。今でも慰霊碑に向かう時には涙がこみ上げてきます。

二度とこのような悲惨ひさんな事が起きることがありませんように祈ります。

